

経済学部 国際経済学科 海外特別研修 寄稿

「ラオス・タイ」と「東ティモール・シンガポール」でフィールドワーク

ラオス 大畑 綾子 (経済3)

9月3日から10日間、海を訪問しました。外特別研修でラオスとタイ 前期の授業では、自分たち興味を持って研究を前に資料を集めて研究をしました。私の研究テーマは「ラオスにおける市場経済への移行と労働問題」です。



▲ ラオス労働組合連合で。前列左が飯沼教授。後列右から2人目が大畑さん

オスが、これまでどのような状況に開発を進めてきたかに焦点を当て、さまざまな現状を見る事ができました。私の研究テーマについても、実際にラオスの労働組合や経済特別区へ赴き、現場でも一番印象に残っています。そのほかに

課題抱えつつも温かさ保つ人々

疑問に思ったことや興味のあることを質問すると、本やインターネットでは手に入ることができない貴重な声を聞くことができました。現地では最も重なる声があることができて、子どもたちが輝く笑顔で迎えてくれた、大人の方たちも言葉が通じない私たちに優しく接してくれました。ラオスの伝統文化や織物の美しさ、食事のおいしさにも感動しました。ラオスにどこかあるのかわからない日本人がいるかもしれない。ラオスのことを伝えていきたいと思っています。



▲ シビライ村小学校校庭にて、校長先生と児童らと (校庭の柵を寄付した後)

せんが、親子で、親日国であり、同じアジアの中にあり、日本の魅力、日本の大勢の人を知ってほしい。強く思いました。今回の研修では五感をフルに使って、

発展途上国の開発経済を学ぶ

ウを訪問。現地大学、政府、援助機関、NGO、農村などを訪問した。

発展途上国の経済社会の特徴や諸問題について、フィールドワークで学ぶ経済学部国際経済学科「海外特別研修」は今年夏、ラオス・タイ(飯沼健子教授指導)と東ティモール・シンガポール(稲田十一教授指導)で現地研修を行った。参加した学生体験記を紹介する。

9月3日から12日までのラオス現地経済と社会の理解を深め、タイの研修は、学生5人がめ。また隣国タイでも政府機関を達成しているシンガポールでは、進出日本企業の工場、文化関連施設を訪問。対照的な両国を比較し、経済発展のメカニズムに関する理解と洞察を深めた。



現地の人々と交流も

東ティモールの首都、デマソララ市など、さまざまな規模でプロジェクトを行っている組織、そこで働く人々から何う話も貴重かつ有意義なものでした。東ティモールが抱えるも

金が必要と感じました。人育成、教育に関してはNGO活動などその重要性を理解してきました。インフラ整備の重要性はあまり実感したことはありません。インフラが整っていないとでは雲泥の差があります。例えば、電気がなければ、教育や栄養面、情報面で格差が発生します。電気が通っていない農村を訪れる給水施設などを視察することで、それらを理解できました。

東ティモール シンガポール 加藤 碧 (経済4)

この海外特別研修を受講 あります。昨年の研修を受講した友人から話を聞き、興味を持ったことにプロジェクと、そして独立間、取り組み、取り組んでいるかを目アを訪れましたが、人々の

インフラ整備と人材育成が両輪

をNGOがどのように支援しているかを目にしてきました。しかし、国連、JICAなどの組織がどのような印象を受けたのか、どこかの印象を受けた。研修前にカンボジアを訪れましたが、人々の

東ティモールの首都、デマソララ市など、さまざまな規模でプロジェクトを行っている組織、そこで働く人々から何う話も貴重かつ有意義なものでした。東ティモールが抱えるも

金が必要と感じました。人育成、教育に関してはNGO活動などその重要性を理解してきました。インフラ整備の重要性はあまり実感したことはありません。インフラが整っていないとでは雲泥の差があります。例えば、電気がなければ、教育や栄養面、情報面で格差が発生します。電気が通っていない農村を訪れる給水施設などを視察することで、それらを理解できました。



これまで開発経 済を学ぶ、発展途上国へ行き、その国が抱える問題点

これまでに開発経 済を学ぶ、発展途上国へ行き、その国が抱える問題点

温かい雰囲気には同じく、を感じる事ができました。また、至るところに、国連の車や関係者がいたことも印象的でした。今までの訪れた発展途上国にはなかった光景でした。

研修で、国連、JICA、並々なぬ工夫と努力、資

温かい雰囲気には同じく、を感じる事ができました。また、至るところに、国連の車や関係者がいたことも印象的でした。今までの訪れた発展途上国にはなかった光景でした。

研修で、国連、JICA、並々なぬ工夫と努力、資

温かい雰囲気には同じく、を感じる事ができました。また、至るところに、国連の車や関係者がいたことも印象的でした。今までの訪れた発展途上国にはなかった光景でした。

オレゴン大生5人が高校生と交流

「日本理解プログラム」(9月20日〜12月15日)を受講中のオレゴン大生が、英語を学ぶ高校生と交流した。写真。留学生はナンシー・ペーコンさん、キャリー・スコットさん、ブリーナ・カイラーさん、サラ・ダンカンさん、ブレンノン・オーステインさんの5人。高校生は神奈川県伊志田高校の1、2年生12人。来年3月に交流プログラムで来日予定。オレゴン大生は自己紹介するとすぐに打ち解け、90分間、英語の会話を楽しんだ。折り紙を折ってプレゼントする高校生もいた。参加した高2の女子は「こんな機会をつくってくれてうれしい。話すスピードが速くて、ついていけないところもあったので、もっと勉強したい」と意欲的に話した。ブレンノンさんは「これから外国人と積極的に話をすれば、英語がもっと上手になると思う。私にとっても、いい体験だった」と笑顔で話した。



日本理解プログラムを受講



1時間JICA支援の現場を視察。ディリからマナナ灌漑支援の現場を視察。ディリからマナナ灌漑支援の現場を視察。